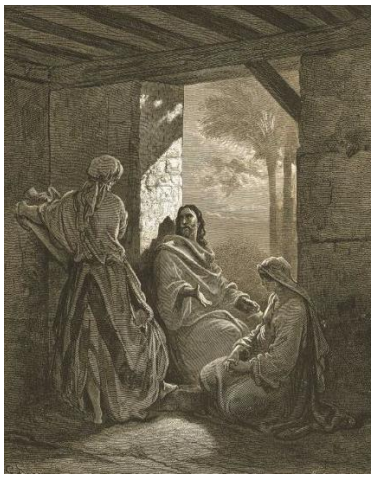
2016年7月17日

福音書からのメッセージ



しかし、必要なことはただ一つだけである。マリアは良い方を選んだ。それを取り上げてはならない。
（ルカによる福音書10章42節）

イエス様一行がある村に入ったときに、マルタという女性がイエス様を家に招き入れます。マルタはイエス様一行をもてなそうとして、自分の家に入れました。マルタという名前は「女主人」という意味で、文字通り家のあらゆることを取り仕切っていた人なのでしょう。そしてもう一人の女性も登場します。その名はマリアです。

マリアはイエス様の足もとに座って、彼の話に聞き入っていました。イエス様の周りには弟子たちもいました。弟子たちもきっと同じように、イエス様の足もとに座って、その話に聞き入っていたことでしょう。

わたしたちの感覚からすると、別におかしくはない光景です。しかし当時の社会では、これはありえないことでした。そのころ、だれかの足もとに座ってその話を聞くことは、その人の弟子がすることでした。つまりマリアは、イエス様の弟子のようにふるまっていたということです。しかしユダヤ教の教師たちは、女性が自分たちの弟子になることを許していませんでした。話している自分たちの前で、女性がひざまずくことなどは考えられなかったのです。マリアはただ手伝いをさぼっていたのではありません。マリアは社会的に越えてはならないとされていた壁を乗り越えていたのです。

そしてマルタは、お客さんを迎え入れた家の女性は何をするべきなのか、社会の常識に照らし合わせて考えていたのです。マリアの姿を見たマルタの心は、きっと乱れていたでしょう。イエス様はくるくる働く自分の姿に気づいているのか、気づいていないのか。イエス様や弟子たちをもてなす準備がなかなか進まないイライラもあったことでしょう。そして怒りの矛先は、マリアに向かいます。マリアがいるところは、座ってはいけないところなのです。女性だったらわたしと同じ所に立たなければいけない。わたしと同じように働かなければいけない。

マルタはいつしか、自分のやっていることだけが正しいと考えてしまいました。いつしかイエス様のための奉仕ではなく、自分中心のことになっていたのです。そしてついには、イエス様にさえ文句を言ってしまうのです。「マリアのことをあなたは何とも思わないのですか」と。

わたしたちも自分が一生懸命になればなるほど、忙しければ忙しいほど、周りが気になってしまうことはないでしょうか。そのような思い煩いが心の目をさえぎってしまい、本当に大切なことが見えなくなるのです。

本当に大切なこと、それは、マリアはみ言葉を求めていたということ。そして、マルタのすぐそばに、み言葉があったということです。そのみ言葉に集中することこそ、わたしたちに求められていることなのです。

桃山基督教会

〒612-8039
京都市伏見区御香宮門前町184
TEL/Fax　075-611-2790
メール momoyama.kyoto@nskk.org
＜教会ホームページ＞
http://momoyama.hannnari.com/